

大相撲 5 月場所を終えてひとこと

「辛うじて東の正横綱の優勝で、ことなきを得た」という表現がぴったりするような場所だった。まずは栃ノ心を称えるところから入ってみることにする。

先々場所平幕優勝を果たした栃ノ心は、あの日から生まれ変わってしまった。自信と信念の固まりと化した栃ノ心が、この場所も一人で演出した感があった。

強い腕力（かいなちから）で寄り・吊り・投げを繰り出す相撲のベースには、春日野部屋伝統の前さばきの良さがあり、これまでも流れにはまると思わぬ力を発揮することが多かった。

立ち合いの鋭い踏み込みで前禪（まえみつ）を取る速さは白鵬・遠藤に並ぶ見事さを持っている。しかしながら、この見事さがいつでも見られるわけではなく、やや腰高な差し手争いになると、横や肩越しから大きく上手を取って、強引な技に出ることもあり怪我の原因にもなることもあった。欧米出身力士・レスリングや柔道出身力士に多く見られる特徴で、把瑠都・黒海などがその典型的な例である。今場所も何番か危なっかしい場面が見られたので、今後最も警戒すべき悪癖かもしれない。脇を締めて前へ出ながら浅い位置のまわしを取ることに専念すれば、安全で安心な相撲で居続けることができるだろう。とは言え、「目標を持ってそれに向かって一心不乱に努力する」ことで得た地位、守ってさらなる活躍をしてもらいたい。名横綱栃木山が興した春日野部屋の「技と心」を伝承する「栃の心（とちのこころ）」を再び光り輝かせて欲しいと思っているのは、小岩駅の栃錦の銅像かもしれない。

マスコミは「大関昇進伝達式での口上はいかに？」とつまらないことばかりに集中して騒ぎまくっているが、もっと内容のある取材報道を！！と言いたい。

直前三場所の勝ち星ばかりが論じられているが、直前 6 場所の成績は下表のとおり。

H29 年 7 月	H29 年 9 月	H29 年 11 月	H30 年 1 月	H30 年 3 月	H30 年 5 月	6 場所合計
東 2 枚目	東筆頭	西 6 枚目	西 3 枚目	西関脇	東関脇	59 勝 31 敗
9 勝 6 敗	4 勝 11 敗	9 勝 6 敗	14 勝 1 敗	10 勝 5 敗	13 勝 2 敗	勝率 0.656

鶴竜は淡々として相撲を取り続けて、結局は賜杯を手中にした。

一方白鵬の相撲は初日から「勝ちたい気持ち」が顔に表われていた。体はやや萎んで弛みは隠せぬ状態の中で表情だけが先走りしている感じを受けた。土俵上で泳ぐ場面も数多く、前半戦の相撲を見た感じでは「いずれ優勝争いから脱落かも？」という心配が消えなかった。

阿炎に敗れた一番には、少々相手を軽んじてしまった油断が見えたし、後半の相撲の中では「早く立つ」ことに拘るあまり、手つき不十分な立ち合いが何度も見られた。録画したビデオをコマ送りで見ると「明らかに手をついていない立ち合い」が確認できた。土俵上の行司も土俵下の審判も全く指摘しなかったが、「目が節穴」か、「横綱だから見逃した」のか、真偽はわからない。些細なことでも、立ち合いのやり直しを命じられることもある下位の土俵に比べると公正さを欠いていると感じた。

再入幕を果たしたが幕尻まで僅かな空隙しかない妙義龍が 10 勝をあげて復活を感じさせてくれた。流麗な相撲の教本を見せるような相撲の流れは、遠藤と双壁だと思っている。やはり妙義龍は幕内上位か三役に居てほしい力士の一人である。勝ち名乗りを受けて花道を歩いて行く時に「後ろ姿の美しさ」を感じる数少ない力士だ。



遠藤は前半の相撲で復活を大きく感じさせたのだが、御嶽海戦で上腕の筋肉を痛めて途中休場となってしまった。何時になると実力が遺憾なく発揮できるようになるのだろうか、気の毒な気もする。

8 勝 7 敗とさほどの成績にはならなかったが、松鳳山の相撲は光り輝

いていた。優勝した鶴竜に一点の黒星を付けたことが評価されて、千秋楽に殊勲賞受賞が決まった。6日目に白鵬、7日目に豪栄道を破った阿炎は、「三賞だ！ 三賞だ！」と騒がれたが、7勝8敗と負け越し、マスコミの空騒ぎだけに終わった。確かに四股が美しく、柔軟な体とスピーディーな身のこなしはあるが、腰高でしかも伸び上がって相撲を取るので重心の位置が高い。足長の体型で腰高で膝を伸ばしたまま、さらに高い位置に繰り出す突き押しなので、脇はがら空き。(左写真)



相手力士から「こういう相撲を取る奴だな」と思われてしまえば、それまでのことと見ている。何よりもこれらの欠点は怪我に繋がりにくいものなので、膝を折って腰を落として、脇を固めて相撲を取らないと先に望みはない。寺尾が育てた力士とは思えず、がっかりだ。千代の国は結婚を機に勝ち星が上がってきたような気がする。スピーディーな何でもやる取り口で、土俵際の最後の最後まで何が起きるかわからないのが千代の国の相撲だったが、基本は「守りの相撲」であり、それが何度かの大けがにつながった。このところ前を出ながら仕

事をしていく相撲に変わってきたが、時々身に染みついた悪い癖が見え隠れすることもある。12勝をあげて初の三賞に輝いた。

上位陣にあたらぬ地位で目立たなかったが、輝が少しずつ低い姿勢から相手に圧力をかけ続ける相撲を身につけてきた。8枚目で9勝6敗は、まずまず評価に値する。来場所が実力評価の場所になるだろうと思う。

再入幕を果たした安美錦は西の16枚目で後がない。明らかに膝がおかしい相撲の取り方で、立ち合いの後すぐに叩きの動作に入ろうとしていて、覇気が感じられなかった。どうなるのかと心配していたが、4勝11敗で再び十両に陥落することになった。「相撲が好きだし、まだやる残っているから・・・」と、「取材陣が期待した言明」は出てこなかった。数場所後に再び幕内の土俵に戻ってくるのを待つことにする。豪風も14枚目で6勝9敗、来場所は高齢力士が二名陥落してしまい寂しくなりそうだ。

以上